

実技検査・面接・小論文

1 実技検査

59年度に実施した国立大学の学部数は、一般入試では62(18%)、推薦入学実施学部では、昼間部5(5.9%)で微増した。これらのうち、東京芸術大学は前年度に引続き、美術学部絵画科油画専攻と音楽学部声楽科の56年度入学者について調査した結果、入試実技の下位成績で入学した者が上位成績で入学した者をしのいで、入学後の実技で優秀な成績をあげていた、入学者は志願者の2.6%に過ぎないことを考えれば、入学後の成績が伯仲するのは当然とされている。兵庫教育大学では、初等教育教員養成課程の2次試験で音楽・美術・体育の実技適性検査を課しているが、59年度からその成績を点数化した。その総点分布はほぼ正規曲線を描くが、科目別では音楽が特異な分布を示していた。

2 面接

59年度に実施した国立大学の学部数は、一般入試では50(14%)、推薦入学実施学部では昼間部78(92%)、夜間部11(85%)で、一般に微増した。今回も医学系で個人面接について次の研究がみられた。滋賀医科大学では56年度から面接を実施し調査を続けてきたが、今回は次の5項目の研究が報告された。①2名1組の試験官による評点間の相関係数は、4年間に0.5~0.6であった。②試験官グループごとの平均成績の分

散を調べたが、標準誤差は4年間に0.418から0.291にまで減少した。③面接成績と入試成績との相関より、高校成績との相関の方が高いが、これは面接時の高校データ使用が関係しているかも知れない。④面接成績と教養課程成績との関連調査では、前年調査と同様に、教養成績は面接成績上位群が下位群よりすぐれていた。⑤面接成績上位群は、下位群に比し、入学時の年齢は若く、留年率・仮進学率は低かった。以上から、選抜方法として面接の妥当性が高い点と、評価方法の洗練がうかがえる。面接の評価方法の具体化、評定尺度の設定、手引書作成、試験官の事前のワーク・ショップ等の検討も次の2大学から報告された。そして、山梨医科大学では面接メモを、①入学後の指導の参考、②学習意欲との関連等の調査のため利用している。佐賀医科大学では6回目の実施であるが、①試験官の間に大きな評価の偏りはなく、②試験官の意見調査では面接の必要性につき意見が一致したと、報告されている。

3 小論文

59年度に実施した国立大学の学部数は、一般入試では96(27%)、推薦入学実施学部では昼間部55(65%)、夜間部8(62%)で変化は小さかった。研究は数大学から報告された。

出題の形式・内容については、佐賀医科大学はここ数年の工夫をさらに深め、図表・数値を

含む自然科学分野の資料により、定量的・定性的に分析し、総合する能力を問うた。評点の分布から出題は適切であったと考えられている。

評価方法についても、佐賀医科大学は討議を深めることなどにより、改善に前進があったと報告している。

成績の分析については、小論文成績と共通1次、2次試験の他教科科目や総得点、調査書の成績との関係が、相関係数・相関図により、多くの大学で継続して調査されている。(横浜国立大学経済学部、新潟大学医学部、滋賀医科大学、大阪外国語大学、九州工業大学、佐賀医科大学、その他)兵庫教育大学では、2次試験の配点比を高くしたにもかかわらず逆転現象が少ないのは、2次試験における小論文の得点のバラツキが少ないためではないかと解されている。

入学後の成績との関係も、引き続き相関係数、層別クロス集計、観察法等によって調査された。(新潟大学医学部、九州工業大学、佐賀医

科大学、その他)滋賀医科大学では、追跡調査により次の結果を得た。①教養課程および専門課程基礎医学の科目において、小論文成績上位群は下位群より僅かに良い成績を示した。②高学歴者群は、入試成績では他の入学者と大きな差はないが、小論文成績は高く、専門課程基礎医学成績では小論文成績上位群より良い傾向を示した。③小論文成績上位群は、下位群に比して、入学時年齢が54・55年度ではより高く56・57年度ではより低い。また、留年者はより少なかった。静岡大学人文学部経済学科の小論文追跡委員会は、共通1次成績の優れている学生群と小論文成績の優れている学生群の入学後の成績を比較して、次の結果を得た。①前者は、総じて成績が優れているとはいえない。②後者は、卒論などで問題関心に取り組み、結果の優れたものが多い。(実施学部数等の統計は、文部省大学課調査に基づく。()内は該当学部総数に対する百分比である。)